ずっしりした手ごたえ

萩　須　高　徳

今はもう季節さえよく覚えておりませんが、大平さんの、あの暖かい手の感触と、その時かわしたいくつかの言葉だけは、なぜかそこだけが私の記憶のなかに、いつまでも、くっきりと残っております。

絵かきである私は、文章にしての表現は、はなはだまずいかも知れませんが、たより甲斐のある、そして誠意がいつも満ちているようなお顔が、その時のパーティーの雰囲気を背景に目にうかぶのであります。

多分、外務大臣であられた時だったと思います。パリの日本大使公邸に私も招かれて行きましたが、過半数の来客は外国人でした。「絵かきの萩須高徳です」という私に、「存じております。ずっとパリの街を描きつづけておられる……」と、少しばかりはにかみのまじった表情でいわれました。

誠実、純真な笑顔をなさる方だ、というのが私の第一印象でした。あるいは私が門外の絵かきだから、会話にも屈託がなかったのかも知れません。

私は世界の数多くの政治家、財界、言論界の人々にお会いしていますが、要するところは、人間対人間であり、大平さんにおいても、人間的に立派な方としての印象をのみ残しております。

職業の如何にかかわらず、基本はそこにあると思うのです。

私は日本のみじめな敗戦後、逸早く国外に出て、以来三十余年、わが国を外から見て生きつづけてきました。

敗戦当初、数年間のみじめさを国外で味わった日本人は、今日、世界屈指の大国といわれる故国を見て感無量

であります。

その間の国づくり、発展のすさまじさは、国民全体の努力であることはもちろんですが、対外的にも、よく国を引っぱってきた指導者級の政治家達の功績を尊重すべきだと思います。

全国民の投票によって選ばれた一国の首領は、やはりそれだけの機運と力量があったと認められるべきで、すべては歴史が語り続けることになりましょう。

優秀な発展途上に現役で倒れられた大平首相の場合も、その代表的なお一人であらねばなりません。

大平さんの笑顔に感ずる厚味のある人間性、これは私がこちらの自然や建造物から学びつづけている美術と、何か通じるものがあったのでしょうか。それは大平さんが「うまくいえませんが、貴方の絵には何ともいえない、ずっしりとした手ごたえがありますね」とおっしゃったからです。

私は今、この言葉を大平さんご自身にお返ししたいのです。

大平さんは本当にずしっと手ごたえのある人間性と、絵から何かを感得するサンシビリティを持った方でした。私の絵に対しても、ことに一昨年、東京で開催の私の回顧展に際してお寄せいただいたご好意は特別なもので、その時、帰国してご挨拶すべき絶好の機を逸したのは、返す返すも残念でなりません。

（画家、在パリ）